

# 貞享三年の西鶴

谷 脇 理 史

一

西鶴年譜を見れば明らかのように、貞享三年という年は、浮世草子作者西鶴にとって、大きな意味を持っていた年であったように思われる。いささか自明の事を記すことにもなるが、まず、貞享三年の西鶴の主な仕事ぶりを私なりの注釈を加えつつとりあげ、その状況を明らかにすることから本稿を始めて行きたい。

貞享三年正月、西鶴は、西鷺軒橋泉作の「近代艶隠者」に自画自筆の板下を書き、自ら序を加えて刊行している。このことは、俳諧師西鶴の中に強く存する隠逸趣味のあらわれとして興味をひかれるが、現在橋泉作が確認されている（注1）作品を、西鶴にひきつけて考えてみる必要はあるまい。もちろん、西鶴のや、や、長い序文のみをとりあげても、貞享三年当時の西鶴の心情を憶測することは可能だが、序跋が作品の内容につきあうのが常套であることを考えれば、これ又、その序を余りに重視

することには問題が生じることになるであろう。が、少なくとも、西鶴が「艶隠者」の刊行にいささかならず努力して貞享三年正月に刊行したことは、「一代男」「諸艶大鑑」などによって盛名を得た好色本作者とは一見異なった作者として転身して行く同年後半期の西鶴を暗示するかのようにも見うけられる。そして、この貞享三年正月という時点が、これまで同時代の小説作者として西鶴に対抗する気概を示して来た唯一の作者（注2）である西村市郎右衛門が、明らかに西鶴に追隨する「好色三代男」を刊行した時点であること、又、同時に、貞享元年三月の江戸板「一代男」に続いて、「一代男」を菱川師宣が絵本化した「大和絵のこんげん」「好色世話絵づくし」が江戸で刊行されたのがこの貞享三年正月であり、いわば「一代男」の盛名がより広く喧伝されつつあったのがこの時点であること、等を考えれば、正月刊の「艶隠者」によって「一代男」とは異なった一面を西鶴が示していることが、同年後半期の西鶴の転身を予想させる一つの象徴的な出来事であったことは確かであろう。続いて西鶴は、同年二月に「好色五人女」を刊行する。その初版が、森田庄太郎の単独版のものであったか、江戸の万屋清兵衛を相版元とし

たものであったかについては、現在説の分れる所(注3)であるが、書肆の要請を今考慮に入れなくても、この「五人女」が、モデル小説という性格を持つが故に、読者を明確に意識しながら書かれざるをえないものであったことは、かつて拙稿『好色五人女』論序説―その読者意識の持つ意味を中心に―(近世文芸・第十五号)で詳述した通りである。さらに、「五人女」刊行時の西鶴は、「一代男」刊行後すでに三年余、売れる作者としての盛名を得て来ており、読者の代表としての書肆からの注文もあったであろうから、その書く意欲は、読者の反応を十分にくみ入れつつ、大いに刺激されつつあったはずである。とりわけ、前年の貞享二年正月に、宇治加賀椽のために新作した浄瑠璃「曆」、及び同年春かと推定される浄瑠璃「凱陣八嶋」がさほどの世評を呼ばなかったとすれば、又、貞享元年六月の二万三千五百句独吟以後俳諧への情熱を失ったかに見える西鶴の俳諧活動を、野間光辰氏の云われるように(注4)「貞享二年以後における、西鶴の明かな俳諧への袂別、それとは反対に、ほぼ同じ頃から積極性を加え来った西鶴の浮世草子の執筆、私はこれを第五書簡にあらわれた西鶴の宣言(「此ころの俳諧の風勢、二入不申候」―引用者注)に結びつけて、西鶴の俳諧から浮世草子への転向は、すでに貞享二年の頃に始まっていた」と考える推定が正しいとすれば、貞享三年二月(又、「五人女」執筆の貞享二年末)の頃の西鶴は、自らの可能性をほぼ浮世草子に限定し、これまでになく意欲的に、浮世草子を書こうとしていたと推定することに異論はあるまい。

そして、貞享三年六月刊の「好色一代女」は、多分そのような時点に書かれているといえるであろう。もちろん、「一代女」執筆の時期を明

確にする資料がない以上推定の域を出ず、又、私なりの推定は後述するが、当時の出版事情より見て、「五人女」の執筆は貞享二年末までには完了していると考えられるから、「一代女」が、それ以後、貞享三年四月頃までに書かれたものと推定することに問題はあるまい。従って、既述の「艶隠者」「五人女」は、前年の成果が貞享三年にあらわれたものと見ることが出来、貞享三年の西鶴の創作活動は、「一代女」の執筆に始まると云える訳である。

「一代女」は、周知のように、作者とおぼしき人物が、「人の日」(一月七日)に嵯峨を散策している折、興味をひかれた二人の若者の跡をつけて行くと、「好色庵」に至り、その庵主である七十歳歳の老女が二人の若者の求めに応じて、自らの一生を語り始め、その話を作者とおぼしき人物が立ち聞きするという発端の構想を持っている。そして、巻一の一の挿絵にも描かれている作者とおぼしき人物及び二人の若者は、本文では一丁半余に登場するのみで、以下は老女の咄という型になっている訳だが、その老女の咄を聞いたのが「人の日」であるという設定がここにあることは、「一代女」の執筆時期を確定して行く上で何らかの意味を持っているように思われる。

とは云っても私は、貞享三年一月七日(人日)の項を西鶴年譜に立て、西鶴この日嵯峨野を散策す、という一条を加え、その体験が「一代女」の発端に生かされている、などと云おうとする訳ではない。そのようなことは、ありえたかもしれないし、単に「春も今ぞと花の口びるうごく」という嵯峨野散策に適当な時節をとり入れているだけかもしれない

い。しかし、貞享三年六月に「一代女」を手にした読者（すなわち西鶴の予想していた読者）は、当然のことながら、「一代女」の老女の告白を貞享三年人日のこととして読むはずであり、西鶴も又、そう読まれることを意識して設定を行なっているはずである。そして、前作「五人女」が貞享二年正月の事件及びその後日譚をとり入れている所からみて、同年後半期の執筆であることを考えあわせれば、「一代女」を西鶴が書き始めた時期を、貞享三年一月七日（人日）前後、あるいはその直後と見定めて置いても良いことになるであろう。

ややささいな事にこだわっている感じであるが、貞享三年の西鶴の文学活動が、「此ころの俳諧の風勢氣不入申候ゆへ」（前出・野間氏論文紹介の西鶴第五書簡）気乗りしなかったかもしれない才旦の句（現在未確認）にひきつづき、意欲十分な「一代女」によって始まっていることをここで確認することは、貞享三年の西鶴を考える上で無意味なことではあるまい。と同時にこのことは、「一代女」が、従来云われるような単なる老女の好色生活のサンゲ物語を意図した作品などではなく、貞享三年という時点を明確に意識した現代風俗小説なのではないか、という風に作品像を転換して行くためにもかかわりを持つことである。

私はかつて、拙稿「『好色一代女』論序説―その一つの設定をめぐる―」（『近世文学論集―小説と俳諧―』昭46・6）において、「一代女」の老女が、若者たちの「身のうへの昔を時勢（いまやう）に語り給へ」という要請に応えてそのサンゲを始めるという設定に注目し、この設定が作品の中で十二分に生かされていることを詳論したことがある。そして、結局「一代女」は、老女の体験（身のうへのむかし）を語るサ

ンゲが目的ではなく、それを「時勢に語」る（いわば、老女を現代の女として二重の虚構化を行いつつ現代風俗とそこに現れる人の心の諸相を語る）ことに力点が置かれている、と論じたのであった。その論拠の詳細は拙論を御参照いただきたいが、今ここで問題なのは、「一代女」のようにサンゲの型を仮にとった作品においてすら、西鶴が正統派のサンゲとは異質の時勢に語るサンゲという型にせざるをえなかったその強烈な現代意識であり、その現代とは、貞享三年初頭という時点であったということである。

が、もちろん、談林俳諧師西鶴の現代意識は、それ以前も、談林俳諧の性格を鋭く反映して強烈であった。又、現実の時間をとり入れて一代記の型をとる「一代男」においてその時間意識がよい加減（注5）なのは、過去より現在に関心を持つ西鶴の意識の反映と見られるであろうし、過去への憧憬を云々される（注6）「諸艶大鑑」にしても、むしろ過去への関心は現在との対比によって行なわれていると見るべきであろう。しかし、過去を現在にすりかえて虚構化するという方法が用いられる「一代女」ほどに、強烈な現代風俗とそこに見られる現代の人心への関心が顕在化する作品は、それ以前には見られないのではなからうか。今、その点を具体的に問題にする必要はないと思うが、私には、「一代女」が、西鶴自ら作り上げて来た現代風俗小説としての浮世草子の実質を見事に把握した所から書かれた小説であったように思われる（注7）。そして、意欲的に浮世草子を書いて行こうとする貞享三年初頭の西鶴が、と同時に、多くの書肆の注文をうけていたと見られる西鶴が、強烈な現代意識を持ちつつ現代の風俗と人の心を把握しようとする「一代女」を書いた

ことは、「好色」の世界を離れて、より広く現代の風俗とそこに見られる人心を把握することに自信を持たせたのではないかと推定する。何故なら、西鶴の浮世草子のねらいが、現代を生きる人の風俗とそのさまざまな心のありようの把握にあるならば、そしてそれを「一代女」のやや強引な方法によって自覚したとすれば、西鶴は何も自分の世界を「好色」の世界に限定する必要はないからである。

確かに「好色」の世界は、それが非日常的な世界であるが故に、さまざまな人の心のありようが拡大化された型であらわになるであろうし、派手であると同時に変化に富む興味深い風俗も多く存在するであろう。

しかし、西鶴得意の「世界は広し」である。又、認識の拡大への要求は、大阪町人の置かれた状況を反映して、西鶴の要求であると同時に、町人読者の要求でもある。とすれば、西鶴は、もはや「好色」にこだわることなく、その作品の世界を拡大して行く上で何のためらいもいらぬはずなのである。が、この問題についてここで先走った結論を出す必要はあるまい。ここでは、貞享三年初頭の西鶴が、強烈な現代意識を持ちつつ、「好色」という視点から人の心のさまざまなありようを風俗中心にとらえようとする現代小説「一代女」を書こうとしていたと云いさえすれば十分であろう。

その「一代女」を、西鶴が貞享三年の何時頃書き上げたかという点も又、推測する以外にない。が、六月中旬刊という刊記を信じ、六冊本を仕上げるのに書肆が二、三ヶ月を要したと推測すれば、貞享三年は三月に閏月があるから、「一代女」の成稿は閏三月末か四月初旬以前という

ことになるはずである。しかし、この四百字詰原稿用紙におおして百五十枚程度の作品の執筆に、西鶴がどれ程の日数を必要としたかは推測の限りではない。もちろん、西鶴が遅筆であったとは考えられず、「一代男」の時点にくらべはるかに散文を書き慣れていたのであろうこと、さらには、老女の告白のほが三人称で語られている部分もある、といった杜撰さが時にあり、十二分の推敲が行なわれたとは信じがたいこと等々の理由から、多くの日数を費していないとは思われるが、現状では、「一代女」の執筆を一月から閏三月の間の四ヶ月と見定めておくより仕方があるまい。

しかし、その間の西鶴が、「一代女」にのみ没頭していた訳でなかったことは、「男色大鑑」巻六の五「京へ見せいで残りおほいもの」で自ら記している三月三日の芝居見物の様子などによって明らかであろう。その間の西鶴の動静を知る資料は、現在これ以外に知られていないが、貞享三年初頭の西鶴が意欲的に浮世草子の執筆ととりくんでいたと前述のように推定出来るとしても、それが近代作家の呻吟の様とは程遠いものであったことは明白のようである。

その後貞享三年六月中旬に「一代女」が刊行されるまで、西鶴が、「諸艶大鑑」「西鶴諸国はなし」を出刊してすでに馴染みのある「一代女」の板元岡田三郎右衛門と何らかの交渉を持ったことは確かであろうが、その間の西鶴の動静は不明である。さらに、西鶴の年譜は現在、同年十一月に「本朝二十不孝」を刊行するまでの西鶴の動きを一切伝える所がない。しかし、「一代女」執筆完了後の西鶴が、ただちに新しい浮

世草子の創作を手がけたであろうことは、十一月の「二十不孝」五卷五冊につづいて、翌貞享四年正月刊の「男色大鑑」八卷八冊、同年三月序（現存本は刊記を欠く）の「懷硯」五卷五冊、同四月刊の「武道伝來記」八卷八冊、が続々と刊行されていることよって明らかである。そして、今、「武道伝來記」の一部分の執筆が四年正月にまで及んでいるとしても、他が貞享三年の執筆にかかるものとするに異論がないとすれば、貞享三年中頃以後年末までの西鶴の時間の多くは、それらの執筆にさかれていたと見る事ができるであろう。

さらに、現在「日本永代蔵」巻五、及び巻六の一―四となっている作品が「永代蔵」の初稿を生そのまま取り入れたものと考え、「永代蔵」初稿の成立時期を貞享三年後半期と推定出来るとすれば（注8）、又、遺稿集「万の文反古」の巻一の二、巻三、巻四、巻五の二の八章の成立時期を同じ時点に見定める仮説（注9）が正しいとすれば、貞享三年後半期の西鶴が浮世草子制作にさいた時間は膨大なものとなるであろう。その上、吉江久弥氏の云われるように（注10）、遺稿集「西鶴俗つれづれ」の一部分の執筆までをこの時点に引き上げることができるとすれば、創作以外にさかれる西鶴の時間は乏しくなっていたはずである。

まさに貞享三年後半期の西鶴は、いかに速筆であったとはいえ、浮世草子の制作に追われて過していたかのごとくである。従って、これまでに、乏しい材料にやや恣意的な注釈を加えつつ貞享三年の西鶴の仕事ぶりを追って来た私は、その後半期を問題にするにあたって、これらの諸作品を執筆しようとする西鶴の状況や創作意図を考え、作品の位相を見定めさえすればよいということになりそうである。しかし、ただちにそ

これらの作品を個別にとりあげる以前に、貞享三年の後半期を全体として見るためには、まだいくつかの問題が残されているようである。すなわち、何故突然にこれほど多くの作品を一気に書いたのか又書けたのか、何故好評を得ていたと思われる好色物の執筆を突然にやめたのか、何故これほどバラエティに富む作品群を書いたのか、又、果して前述の諸作特に「永代蔵」の初稿や「文反古」の約半数等をこの時期の執筆と確定してよいのかどうか、等々である。

ただちに思いうかぶ以上のような問題は、当然のことながら相互に関連しあう部分を持っているが、以下では、できるだけくり返しをさけつつ、それらをやや具体的に問題にして行きたい。

## 二

貞享三年の後半期に西鶴は、何故突然のようにこれ程多量の作品を書いたのか、又、書けたのか——この問題に答えることは比較的簡単であろう。前述の「五人女」「一代女」の部分でも触れたように、西鶴の立場から見れば、俳諧や浄瑠璃に対する情熱を失なっている反面、「一代男」以後の小説が好評を博しているのが貞享三年の時点であるから、小説執筆に最も情熱をそそげる主体的な条件は十分に整っていた訳であり、それがこの時期の西鶴が意欲的に創作を行なおうとする第一の理由となっていることは確かである。と同時に、「一代男」刊行後すでに四年、もはや浮世草子界の第一人者である西鶴に、売れる作品の執筆を依頼する書肆の要請も又、西鶴の書く意欲を刺激したであろうことは、十

分推測出来る所である。とりわけ「二十不孝」以後の作品の多くには、江戸の書肆万屋清兵衛が相版元として加わっており、作品の販路（つまりは読者）が江戸にまで拡大していること、又、「二十不孝」では「一代女」以前より馴染みのある書肆岡田三郎右衛門とともに大阪の書肆千種五兵衛が相版元となり、「男色大鑑」は、俳書の出版を通じてこれまでも縁のあった大阪の書肆深江屋太郎兵衛が始めて西鶴小説の出版を手がけて京の書肆山崎屋市兵衛とともに相版元になっていること、さらに貞享五年二月刊の「武家義理物語」以後にも、それ以前の西鶴本の出版に縁のなかった書肆が続々版元として登場していること、——これらは皆、読者の代表ともいべき書肆の注文が、貞享三年後半期頃から西鶴に集中したことを裏付け、むしろ西鶴を書かざるをえない状況に追い込んだともいえそうである。

結局、この時期の西鶴が多量に作品を書いた理由は、西鶴の創作への意欲と書肆の要請とが、はからずも一致し、いわば相乗効果を上げた点に求められるであろう。が、西鶴の意欲と書肆の要請が一致したとしても、多量に書けるとは限らない。それでは、何故この時期に多量の作品を西鶴は書くことが出来たのであろうか。

まず考えられることは、健康状態のよさとか、散文を書きなれて来たとかいう単純な理由であろう。前者については確認のしようもないが、基本的な条件として一応認めておいてよいと思われる。後者は、「一代男」から「一代女」まで六つの散文作品を書いて来ている以上当然のことであるが、その事実、貞享三年後半期に書かれた作品の文体を具体的に検討することによって確認することができるであろう。しかし、こ

の時期の文体が平明になっていることは従来も説かれているし、それを具体的に今ここで追求してみる必要はあるまい。

が、何故書けたかという問題を、現在、以上の単純な理由のみで片づける訳にはいかない。何故なら、この時期に書かれた作品には、材料さえ集めれば書きやすい作品が多いように見うけられるからである。すなわち、奇談的なストーリーに依存する面の多い作品（二十不孝・男色大鑑一～四・懐硯・武道伝来記・文反古の八章）や身近な見聞を随想的に書くことによって成り立ちうる作品（男色大鑑五～八・永代蔵の初稿）がすべてであり、そこに、書肆の要請に安易に応えようとする西鶴の姿勢を見ることが十分可能なのである。

各作品の具体的な位相については後述するが、たとえばこれまでも「西鶴が『男色大鑑』を執筆するに当って、とくに不案内な武家社会の衆道を描くについては、たとえば巻三の四『薬はきかぬ房枕』が、近世初期の写本『藻屑物語』によっているように、伝聞はもとより諸家の記録をあさり、前記の衆道教訓書類も参考にしたことは歴然たるものがある」（定本西鶴全集・第四巻・暉峻康隆氏解説）と云われており、「男色大鑑」巻一の四と実録の写本を通して、その様相を具体的にさぐった野間光辰氏「西鶴五つの方法（完）」（文学・昭和44年3月号）のすぐれた成果もある。さらに、暉峻氏が「本書（武道伝来記―引用者注）の文体は非装飾的な記録体もしくは説話体である。これは多分西鶴が参考にした敵討に関する記録類の文体を意識した結果ではないかと思ふ。なほ後考を待つ」（同前）と云われた点が、今後の資料の出現によって実証されるとすれば、貞享三年後半期の西鶴が多量に作品を書いた理由の一つは、

書きやすい題材を選び、その材料をやや安易に吸収することにあつたと考えざるをえないことになるはずである。

そして、この書きやすい素材を選んだということが、後述の西鶴の素材の転換と何らかのかかわりを持つことは、当然予想できるであろう。が、書肆の要請に応えるべく西鶴がどのような努力を行なおうとしているかは、第三節以下で個々の作品に則して少しく具体的に触れる予定なので、今は、素材を転換して書きやすい素材を選んだことが多量に作品を書けた理由の一つだと指摘するのみにとどめておきたい。

が、この時期の西鶴が何故多量に書けたかという点に関しては、ここにもう一つの問題がある。それは、助作者の問題、すなわちこの時期の西鶴作品に弟子の作品が編入されているのではないか、あるいは、中村幸彦氏のいわゆる西鶴工房の存在（注11）が考えられるのではないか、ということである（注12）。

確かに、右のように考えられるとすれば、それが西鶴作かをきめるのが困難であるにしても、この時期に西鶴が多量の作品を書けた理由は、いとも簡単に解決出来る。が、現在の段階では、右の見解にはやや具体的な実証に欠ける点があり、推定、あるいは仮説の域を出ないことも事実である。もちろん、西鶴の周辺に助作者となりうる人物のあることも従来云われる通りであり、この時期の作品の文体には「一代女」以前と異なっているものもあるから、その文体の精細な検討によって、助作者の作品の編入、あるいは西鶴が助作者の作品に筆削・補筆等を加えて編入したという事実が、今後説得力を持って論証されることがありうるかもしれない（注13）。しかし、現在の所私は、この文体の相異が、素材

となつた「記録類の文体を意識した結果」（前出・暉峻氏の言葉）、あるいは題材によって文体を変えるのは当然とも云えること、又は西鶴の散文への習熟や書肆の要請に応えるための拙速さや推敲を怠つた安易さ、等々の理由によって生まれたと考えてもよいのではないかと思う。

又、助作者を考える漠然とした根拠の一つに、この時期の執筆量が、一見非常にボウ大に見えることにあることも確かであろう。しかし、この時期に執筆したと見られる作品の分量は、四百字詰原稿用紙に直せば、「二十不孝」が約百二十枚、「男色大鑑」が約二百三十枚、「懐硯」が約百三十枚、「武道伝来記」が約二百十枚、「永代蔵」巻五、六（同五をのぞく）が約五十枚、「文反古」の八章が約四十枚であり、合計八百枚弱にすぎないから、西鶴が八ヶ月間にこの程度の分量を書くことは不可能とは思われない。まして、月産千枚を呼号する流行作家のいる現在、さして驚くに足る分量ではないかもしれないし、二万翁西鶴の一昼夜独吟二万三千五百句が、字数にして三十五万字余、四百字詰で楽に八百枚を超える分量であることを思えば、この位は軽いと云えるかもしれない。

とは云つても、私は、拙稿「西鶴小説における成稿過稿の一面」（跡見学園女子大学紀要・第二号）でも触れたように、素材集めの協力者は当然居たと考えてよいと思うし、協力者が持ち来つた材料を十分消化せず、生のままで使つた可能性のあることも否定できないと考える。しかし、その程度のことは、現在でも流行作家にはありがちのことであり、ましてや著作権のなかつた当時において、写本で伝わつた奇談や記録類などを時に流用することがあつても、西鶴の著作であることを否定

する必要はあるまい。私も又具体的な論拠に乏しいことになるが、私は一応貞享三年後半期に書いたと見られる以上の作品を、すべて西鶴作と見るべきだと考える立場をとりたいと思う。

次に問題となるのは、西鶴のいわゆる好色物が好評を博していたこの時点で、何故好色物を書かずに素材を転換したのか、ということである。

この問題については、現在まで種々の説がなされているが、貞享三年に好色本の禁令が出たという説は否定されている(注14)し、禁令が出ていないとすれば、利にさとい書肆が西鶴に要請し期待したものが、現に好評を博している好色物であったことに間違いはないであろうから、現在の段階では、西鶴のこの素材の転換を外部的要因によって説明することはできない。従って、現在この問題は、西鶴自身の問題として考える以外にはないようである。

とすれば、答はずでに明らかであるように見える。すなわち、二番煎じを嫌い常に新しい世界を求める西鶴をイメージ化し、すでに好色の世界を描き切った西鶴が、新しい世界を求めて転進して行ったのだ、と答えれば十分であるように見える。そして、その跡づけ方は異なるとしても、従来云われるように、その転進を西鶴の必然として跡づけて行けば、この問題に対する解答としては十二分の出来になるかのようである。

そして、私も又、そのような良心的な作家像を否定しようとは考えない。読者の好評を得、書肆の要請をうけている好色物を、二番煎じになるかならぬかは別として書こうとしないということには、何らかの覚悟なり自信なりがあったことは確かであろう。それを作家的良心と呼ぶこ

とに、私は躊躇はしない。

しかし、前出の拙稿「『好色一代女』論序説」でも触れたように、広い世界への認識拡大の欲求が、西鶴の基本的な認識構造の原点であること、と同時にそれは、西鶴のみではなく、当時の町人読者のものでもあったことを忘れる訳にはいかない。又、「一代男」以来西鶴には、広い世界の「人のこころ」に対する強烈な関心があることは確かであり(注15)、それが「諸艶大鑑」以後一層拡大され(注16)て、前述の「一代女」のやや強引な方法へとつながって行っている訳であるが、その「一代女」の作品構造自体に、それ以後の素材の転換を予測させるものがあったことは確かである。さらには、「好色」の世界に新しい話題を求めるより、前述の諸作品のような世界をとりあげる方が書きやすかったという、すこぶる現実的な理由もあったかもしれない。

以上の点から私は、西鶴の作家的良心を認めるにやぶさかではないにしても、それをあまりに強調しすぎることには不安を覚える。西鶴が潮流を追う作家でなかったことは事実であるが、西鶴のこの転進に気負いや苦渋を見て、サツソウとした西鶴のイメージを抱くのは、余りに近代文学者のイメージに引きつけすぎた理解の仕方であるように思われる。

結局私は、貞享三年後半期に行なわれた西鶴の素材の転換を、さりげなくサラリと行なわれたものと理解し、ことごとしい理由を付ける必要はないものと考ええる。それ故、ここで私は、山口剛氏の「西鶴が浮世草子に筆を執りはじめた時、もう人生に対する考え方は熟していた。四十歳から五十二歳まで、その作の相は変るとも、貫くものに、さまでの変化はない。変化は、みづからの興を対象すると共に、また読者の興を



眼目とすることによって起る」(日本名著全集「西鶴名作集」解説)という西鶴理解を引用し、何時もながら敬意を表しさえすればいいようである。

次の問題は、この時点で書かれた作品が、何故にバラエティに富んでいるのかということである。後述するように、西鶴にはこのバラエティに富む題材を通して把握しようとする何かがあったことは確かだと思われるが、不孝、男色、奇談、敵討、新長者訓、書簡体小説と見てくれば、ここには、好色物・町人物・雑話物といった言葉で二つ以上をくくれる作品はないことになる。何故このような結果が生まれたのであろうか。

現在、好色物から雑話物・武家物を経て町人物へ、という単純な図式をそのまま信ずることは出来ないが、西鶴が、浮世草子作者として出発して三年余は好色物に、最晩年の数年は町人物に力をそそいでいたことは事実であり、山口氏の云う西鶴の「興」が一つの傾向を示す場合のすることは確かである。しかし、この貞享三年後半期の多産な西鶴には、一見それがないのである。

が、その理由も又簡単であるかもしれない。というのは、好色の世界をとり上げつづけて来た西鶴が、より広い世界に目を向けようとした時、その食欲な目が認識しようとする世界は数多く、一つに限定しきれなかったという見方を提出するか、又は、未だこの時点では町人物の世界をつかみきれず様々な世界に自らの可能性を求めて模索しつつあったのだ、という見方を提出するかすれば、十分な答になりそうだからである。そして、この両者の見方は、共通する部分を多分に持ち、盾の両面

とも云えるであろうから、この時期の西鶴作品のバラエティは、新しい世界へと認識を拡大しつつ最も興味ある世界を模索しつつあったが故に生じたと結論することが出来そうである。

しかし、当然のことながら、各作品での西鶴の模索の方向は異なっており、その作品にかけている西鶴の比重は同じではない。そして、その点については節を改めて各作品ごとに論じるが、今ここで注意しておく必要があるのは、従来ともすれば、作品を成立順に見て、そこに西鶴の必然性を跡づけようとする傾きがあった点に関してである。もちろん、ほぼ同時期に書いたとは云ってもその成立に先後があったことは確かであるから、作品相互に何らかの補助線を引き、必然性を論じることに意味はあるであろう。しかし、ほぼ同時期に書いている作品であるが故に、又、未だ一つの世界に「興」を集中しえない模索の状態にあるが故に、あえて西鶴が各作品ごとに作品の世界を変えているのだとすれば、推定の域を抜けえない成立時期の先後によって作品間の必然性を云々することは、結果論の誹りをまぬがれないはずである。むしろ私には、系統立てて作品相互の関連を論じるよりは、この時期の西鶴の模索の諸相を並列的なものと見て具体的にさぐって行くことの方が、現在必要であるように思われる。そしてそのことが、模索の過程を経て浮び上る町人物の世界を、より明確にとらえる上で意味を持てていないかと考えるのである。

貞享三年の西鶴の問題にしようとしている本稿は、ようやくその後半期を具体的に問題にできる段階にまで来たようである。以下、少しく各作品への私の視点を提示しつつ、貞享三年後半期の西鶴が、新しい作品

の世界を打ち立てて行く様相をさぐって行きたい。

(なお、前述の問題点で提示したように、「永代蔵」の初稿、及び「文反古」の八章をも貞享三年後半期の作とすることには異論がありうると思うが、そのように考える私の論拠は、「『日本永代蔵初稿の成立時期』(文芸と批評・第一巻五号)、「西鶴小説における成稿過程の一面」(跡見学園女子大学紀要・第二号)及び「『万の文反古』の二系列」(国文学研究二九集)、「『万の文反古』における書簡体の意味」(同上三九集)等の拙論を御参照いただければ幸である。)

## 三

「一代女」執筆直後に西鶴が手つけた作品が、貞享三年十一月の刊記を有しつつも翌四年正月の日付けを序に記す「本朝二十不孝」であったか、翌四年正月の序の日付けと刊記を有する「男色大鑑」であったかは、論の分れる所である。すなわち、女色から男色へという転じ方に必然性を見ようとすれば、「男色大鑑」を先に手がけたと見る方が都合がよい訳だが、四年正月の刊行を予定して序の日付けを書いたにすぎず、実際には三年十一月に刊行されたのが「二十不孝」であるとすれば、一応仕上りは「二十不孝」が早く、従って「二十不孝」を先に手がけたとする考え方も成り立つ訳である。しかし、刊行の先後は明らかであっても、西鶴が序の日付けとともに正月刊を予定している以上、どちらを先に手がけたかは明らかではないし、「男色大鑑」が内容的にも前半後半に分れる大部のものであることを考えれば、「男色大鑑」を半分仕上げた時

点で「二十不孝」を執筆し、その後「男色大鑑」の残りの半分(注17)を仕上げたのではないかと、あるいは、同時に書き進めていたのではないかと推測することは可能であろう。

ところで、近時、暉峻康隆氏は、「男色大鑑」が「一代女」でも多用されている「遊仙窟」の字訓をしばしば用いていること、「一代女」にも引用される「九想詩」を「男色大鑑」でも用いていること、「二十不孝」には拙速の感あることなどを主な論拠とされて、「男色大鑑」先行説となえられた(注18)。未だ口頭発表を行なわれたのみで詳細は論文化されるのを待つ以外にないが、本稿はその先後を論ずるのが目的ではないので、一応暉峻氏の御説に従い、「男色大鑑」から問題にして行くことにしたい。

「男色大鑑」は、周知のように、前半四巻と後半四巻とで、明らかにその題材が異なっている。前半四巻は、序章的な巻一の一、町人を主人公として男色をとりあげた二の四、三の三、及び四の一、比叡山を舞台とした三の一をのぞけば、武家社会の衆道を取りあげているが、後半四巻は、全体が歌舞伎若衆の噂咄やそれに関連する作者の見聞談を中心とする。いわば、前者は仮名草子の男色物を源流とするのに対し、後者は役者評判記の世界を小説的に拡大したものと見ることができであろう。そして、前者はストーリーの面白さを中心とした小説的なものが多いのに対し、後者は小説的な構想を欠いた随想風の作品が多い。

以上は、一読すれば明らか「男色大鑑」の特色であるが、一見異質とも見られる両者を「男色」にかかわりを持つというのみで一書にした

のは何故であろうか。「大鑑」である以上、歌舞伎若衆の話題をとり入れないのは不備と判断して書き始めた巻五以後が、身近な世界であるが故に、四巻分にまで拡大してしまったのであろうか。私は、やや憶測めくが、「男色大鑑」の成立に関して次のような仮説を持っている。

西鶴が「一代女」を書き上げたのが閏三月末か四月初旬であり、その頃それを書肆岡田三郎右衛門に渡したとすれば、その時点で「二十不孝」の板元岡田の注文には応えたことになる。とすれば、この時点での西鶴に對する書肆の要請は、これまでも俳書の出版で縁がある「男色大鑑」の板元深江屋太郎兵衛のものと見る方が自然であろう。そして、その時点で、西鶴の小説を始めて出版しようという深江屋の要請に応じて作品を書こうとする西鶴が、遊里と同じ悪所の世界であると同時に馴染みの深い芝居関係の咄を書いてみようと考えるのは、前述のように「一代女」の構造自体に西鶴の素材転換の可能性を見うるとすれば、それが書きやすい世界であるが故にすこぶる自然なことである。と同時に、「男色大鑑」後半の最も新しい話題が、巻六の五「京へ見せいで残りおほいもの」で記す貞享三年閏三月八日の鈴木平七の死であり、それにつぐものが巻七の三「袖も通さぬ形見の衣」に描かれる貞享三年正月の戸川早之丞の切腹死であることにも意味がありそうである。とりわけ前者の作品には作者西鶴自ら登場して活躍するように、身近な世界に居たと思われる二人の役者の最近の死が、西鶴に芝居の世界をとりあげる契機を与えたかのように見える。そして、「腕久一世」「五人女」巻二、又、後年の貞享五年三月刊の「嵐無常物語」をはじめ、西鶴にはいわば追善癖があるかのごとく、モデルの死の直後に作品を書く例があることは、鈴

木平七の死を契機に芝居者の世界を書こうとしたのではないかという推測を裏付けるかのようなものである。

以上、やや憶測にすぎない感もあるが、私は、四月初旬前後、西鶴は、後半に収められる作品から書き始めたのではないかと推定する。しかし、書きやすい身近な世界であっても、あるいは、そうであるが故に、西鶴にとって日常化しているその世界は、小説的な面白みに欠けがちである。と同時に、西鶴には、一つの話題を総合的に認識して行こうとする基本的な志向がある。とすればその時、西鶴の認識しようとする世界が、男色という視点から拡大され、その習俗を残す武家の世界、現実社会の町人の世界、巻三の一の僧の世界へと拡大するのも当然であろう。しかも、武家の世界をあつかいつつも、若衆たちの男色から巻四の四の老人の男色まで、又、大名と小姓の組み合わせから浪人あるいは男色故の隠棲者まで、その男色の諸相はバラエティに富む。いわば「男色大鑑」は、前半四巻をまっけてはじめて見事に完結するのである。

やや論拠に乏しい推測を書きつらねたが、それは、右のように「男色大鑑」を考えることによって、従来ややもすれば、男色の意気地や衆道の義理を「男色大鑑」の主題と見立て、全四十章の中から論じるに好都合な数章をとり出して西鶴の唯美主義を強調しつつこの作品を把握し規定して行こうとする場合の多い「男色大鑑」論に、ささやかな疑問を提起するためである。そして、仮に右に記した成立過程の憶測が承認されがたいものであるとしても、西鶴が、「大鑑」という志向によって、その前半で現実社会では非日常化している男色の諸相を総合的に把握しようとし、後半で、本来は悪所故に非日常的な世界であるはずの芝居者の

世界を、西鶴のそれへの親近故に日常化してとらえつつ幅広く把握することによってなり立っているのが「男色大鑑」であることは確実である。

もちろん私は、「男色大鑑」の中での印象的な作品が、男色故の意気地をとりあげたいいくつかの作品であることを否定するつもりはないが、そののみをとり立てて他を切り捨てて「男色大鑑」を評することは、西鶴の創作意図を見誤り、西鶴が男色を通じて認識しようとするさまざまな人間の生きざまに対する旺盛な好奇心の広がり限定するだけに終ってしまふのではないか、と思う。と同時に、現在の我々に批評しやすい作品のみをとり立てて作品を見て行くことは、むしろ我々の認識の広がりを圧えることになるであろう。「男色大鑑」論は、まずそれが「大鑑」であることを確認し、そこで描こうとするバラエティに富む男色の諸相によって、西鶴が何を認識し把握し読者に提示しようとしているのかを適確につかむ所から始まらなければならない。が、ここはそれを論じる場ではないから、一応右のように、「男色大鑑」に立ち向かう私の視点を提示するのみにとどめて、次の作品「本朝二十不孝」に移って行きたい。

「本朝二十不孝」が、「一代女」の刊行にひきつづきよせられた書肆岡田三郎右衛門の要請に依って書かれた作品であろうということは、その刊記より明らかである。そしてこれが、將軍綱吉の孝道奨励政策や、それに乗って新刊再刊される孝をあつかつた草子類の流行を敏感に反映して書かれた作品であることも、従来強調されている通りであろう。いわば西鶴の現代意識がとりあげさせた素材をあつかつたのがこの作品であり、その意味でこの時点の西鶴はすこぶるジャーナリストティックであ

る。

と同時に、時流にのるとは云え地味な素材をとりあげた故か、又、不孝というやや抽象的な題材によって二十の短篇を類集するという作品形式を始めてとった故か、西鶴は、作品に変化を与えるべく、いわば編集者の配慮を随所で行なっている。目録に各短篇の内容を暗示する小さな挿絵をかかげるアイデアが西鶴によるものであったか否かは解らないとしても、各短篇の舞台を変えて諸国咄のスタイルをとり、最終章を祝儀で結ぶべく孝行咄に仕立て、各巻に一章づつ女性の不孝者を配し（注19）、さらには、各巻に一章づつ孝と不孝とが対比される作品を置く（注20）といった細かい気のかい方までもしている。このように「二十不孝」は、単に題材がジャーナリストティックなだけでなく、貞享三年後半期の西鶴が、読者を明確に意識しつつ書こうとする姿勢を十二分に示している作品と云えそうである。

しかし、私は、「二十不孝」が時流に敏感に反応する西鶴のジャーナリストティックな姿勢から生まれたものであることに異論はないとしても、かつて『本朝二十不孝』論序説（国文学研究・三六集）で論じたように、西鶴が孝道奨励を意図していたとか、綱吉の政治に対する反撥を込めて書いたとか、考えることはできない。その論拠は拙論を御参照いただきたいが、序文のみにあえてこだわって論じた拙論は、当然本文でも生きるのではないかと思う。確かに西鶴は、本文中でも勧善懲悪の趣向をかまえ孝道を奨励する型をとってはいるが、そこに西鶴の道学者的な情熱を見ることは出来ないし、又、それをカモフラージュと見ること無理であろう。読者の持つ常識を理念的にうちこわそうとする発想を

持つことのない近世の作家西鶴は、読者と共通の常識に抵触しない粋をもうけているだけであり、作品での西鶴の腕の見せ所は、その粋にある訳でもなく、その粋を打ち壊すことでもないはずである。

「二十不孝」で西鶴がねらっているものは、やや類型的に、又奇談めいた誇張をもまじえて不孝者のさまざまありようを多面的に描き、それによって拡大して浮びあがる浮世に生きる人の心や現代風俗を認識し把握して行くことではなかったか、と私は考える。その具体的な様相を論じる場ではないので、作品に則した論証は別の機会にゆずるが、認識者西鶴にとって大事なものが、何を認識しそれを如何に面白く表現するかであったことは明らかである。西鶴が「二十不孝」で不孝をとりあげたことは、そのジャーナリスト的なセンスを示すと同時に、不孝者が日常的な世界から指弾されるものであるが故に、より鋭く現代風俗やそこに現れる人の心を認識し把握し、面白く描き上げるにふさわしい素材であったからであると考えざるをえない。そして、「二十不孝」が、不孝者の種々相を巾広く具体的に認識し、読者の興を引くべくできるだけ面白くそれを描きあげる時、孝道奨励がさげられる時流の中にある人の心の実相をより鋭く読者に認識させるのである。それは、時としてもっともらしく章末につけ加える場合の多い常識的な教訓を裏切る程になることもあるが、理念によって自らの認識を限定し規制しようとする認識者西鶴にとって、それはどうでもよいことなのであろう。むしろ、自らの認識したものが、その信ずる理念を、又常識の枠を超えた時、後者と前者とを併存させて平然としつつその認識を拡大することのみに専念して行く所に、西鶴の面目があるのである。

やや抽象的な記述になってしまったが、私の「二十不孝」論は、西鶴が、そのジャーナリスト的な素材を、現代の風潮の中に浮びあがる人の心の種々相を認識すべく如何に有効に生かしているか、又、それをどんな方法で面白く書きえているか、そしてそのことが如何に西鶴の、又読者の常識の枠を超脱しているか、という視点を中心に組み立てられなければならないようである。

貞享四年花見月（三月）初旬の日付けを序に記す「懐硯」は、現存本に刊記を欠くが、「二十不孝」序に出刊予定日の日付けを書く西鶴のこゝと、「懐硯」の刊行を三月頃と見ることに異論はあるまい。又、内容的に見て、貞享二年正月刊の「西鶴諸国はなし」の後をうけるものであり、「諸国はなし」にくらべ人事をめぐる奇談が多いという従来の分析も正しいといえるであろう。さらに、「諸国はなし」には本文中に現われなかった咄の聞き手が、「懐硯」では一宿道人伴山として登場し、その人物が諸国を旅しているという趣向を章首にもうけ、読者の興を引こうとする努力を行なっていることも一読明らかである。

そして、本稿の主題に則していえば、このような作品を西鶴が書いたことの意味は、やはり貞享三年後半期の西鶴の状況を考えることによつて明らかになるはずである。すなわち、前述のように、書肆の要請にこたえてつつ新しい作品の世界を求めて模索している西鶴が、「一代女」以前に書いた唯一の好色を題材としない作品「諸国はなし」の雑纂的な手法を生かすことによつて、新しい作品のために集めた、あるいは弟子にも集めさせたどんな材料をも編入しようことを思いつくのは、すこぶる当然

のことだからである。と同時に、「二十不孝」にも見られた貞享三年後半期の西鶴のジャーナリストティックな姿勢は、単なる咄の雑纂的な羅列を行なうより、各話に聞き手を登場させることによって、読者の興をいささかでも引きつけようとするであろう。又、「諸国はなし」執筆の頃より現代の風俗や人の心に対する関心が強烈になり、それを浮び上らせることに認識者西鶴の面目を見せようとするのがこの時期の西鶴であるとするれば、人事をめぐる奇談を中心としてそれを行なおうとするのも、すこぶる当然だということになるであろう（注21）。

やや憶測めいた記述を行なったが、「懷硯」という作品は、以上のように貞享三年後半期の西鶴の状況と密着してとらえることによって、その位相が明確になることは確かである。そしてそれが、西鶴にとって、材料を集めさえすれば書きやすい作品であったが故に、やや安易に、時には文体の不統一までもそのままに残して、一書が編まれる結果となった訳である。それ故に、「懷硯」の評価には、それを全体として把握して行く上での困難さが常につきまとう。が、逆に見れば、そのことは、風俗や人の心への西鶴の認識が、一つの主題によって類集しきれない世界にまで広がっていることを雄弁に物語っているはずである。従って、「懷硯」の世界は、「不孝」「敵討」「新長者譚」といった限定された題材からはいかがい知れない貞享三年後半期の西鶴の関心の広がりを見る上で、多くの示唆を与えてくれるように思われる。

が、人の心への強烈な関心が、その認識の巾を拡げ、同時期の他作品に劣らぬ数篇の短篇を収載してはいても、「懷硯」が奇談珍談としての面白さにたよりすぎているが故に、又、材料の消化がやや安易に行

なわれているが故に、全体としてやや低調な作品であることは否定しがたい。しかし、エネルギーに書きまくる中で自らの世界を確立して行こうとする作家に、時に駄作の生まれるのは当然であるから、貞享三年後半期の西鶴が、書肆の要請に応えて積極的に書きまくるその状況を全体的に解明する上で重要な意味を持つる作品として、「懷硯」を位置づけることは可能であろう。「懷硯」は、近代のいわゆる純文学作家とは全く異なつた西鶴の文学への姿勢を、様々な点から浮び上らせてくれる作品のようである。

「万の文反古」十七章のうち、この時期に書かれたと私の推定する八章は、奇談珍談としての面白さに力点を置いた作品や、同時期にとりあげた主題を、書簡体という形の面白さによって生かそうとした作品が多い。そのうち、卷三の二「明て驚く書置箱」が「懷硯」二の一の「後家に成ぞこない」と、又、卷四の一「南部の人が見たも真言」が「懷硯」卷一の四「案内してむかしの寝所」とほぼ同様なストーリーを持つていることは、周知の事実であるが、又、卷四の二、卷五の二も、書簡故の報告という型をとりながらも、中心になる部分で候文体がくずされ、「懷硯」的奇談としての面白さに重点が置かれている。さらに、卷一の二、及び卷四の三は不孝者を取りあげ、卷三の一は男色を題材とするというように、八章のうち七章が、同時期に書かれたと思われる作品と類似する傾向を示しており、内容的に見れば、どこか新鮮さに乏しい。残る一章卷四の二のみは、江戸下りの趣向を中心に町人の経済生活をとりあげてはいるが、「永代蔵」の初稿がこの時点に書かれているとすれば、こ

れ又、他の七章と同じ傾向を示していることになる。

これは一体どうしてなのだろうか。答は簡単である。すなわち、西鶴は、書簡体で浮世草子を書くという趣向に力点を置き、同時に書いている作品の材料の中から、書簡体で書くにふさわしいものを取り来たつて趣向の面白さで売れる作品を書こうとしているからである。そして、このような思いつきが、この時期の西鶴に生まれる根拠は数多くある。すなわち、まず、書簡体の候文体が、寺子屋の教科書として読者に馴染みのある往來物の文体であり、商用その他の手紙を読み又書く当時の読者にとっては、小説の文体以上に親しいものであり、拡大しつつある読者の要請に応えるには具合のよい文体であることである。次に、書簡体小説の当時における盛行は、つとに暉峻康隆氏の「日本の書簡体小説」（越後屋書房、昭和18年）の詳論する通りであり、時流に、又出版界の流行に敏感に反応する西鶴であることは、すでに論じたごとくである。又、書簡への西鶴の興味は、すでに暉峻氏も「一代男」以後の作品をとりあげて詳細に跡づけているが、私見では、「書簡」を趣向に用いその文体を作中に利用することが最も多いのは、「文反古」の八章を書く直前の作と思われる「男色大鑑」である（注22）。

以上のように、出版書肆の要請に依えて多産な西鶴が、やや安易に趣向にたよろうとする作品を貞享三年後半期に思いつく理由は推定できる。そして、そこで生まれた結果は、かつて拙稿「『万の文反古』における書簡体の意味」（国文学研究・三九集）で論じたように、八章中七章が、長文にわたって候文体をくずした文体を持つという安易さを示し、書簡体を効果的に生かしえぬやや不備な作品を生むことになったのであった。

が、その安易さを、現在の我々はとがめ立てする必要はない。何故なら西鶴は、これらの作品の発表を少くとも留保した訳だし、この時期にやや安易な思いつきから行なったこの実験が、後年に書かれ西鶴小説中でも最高の傑作と称される「文反古」巻一の一、同三、巻二の三、などを生むことになるからである。この時点での「文反古」の八章における西鶴の模索は、その認識の世界を拡大することではなく、その方法の多様化への試みではあったが、そしてそれは多分やや安易に出発したものではあったが、それが、書簡体を文学的に生かせる素材を発見させ、すぐれた作品を生む原点になっていることは確実である。貞享三年後半期の西鶴の安易さが、又安易さに安住して書きとばせるずぶとさ、あるいは近代的な意味での文学意識の低さが、後年の秀作を生むという皮肉な（否、むしろすばらしい）現象は、次に触れる「永代蔵」初稿の場合と同じく、この時期の西鶴を考へることの意味を一層重からしめるようである。

「日本永代蔵」巻五及び巻六の一―四に現在もとのままの型を多分に残しながら収録されていると私の推定する「永代蔵」初稿の実態がどのようなものであったかについての詳細は、前出拙稿および「日本永代蔵」初稿の問題」（学燈社「国文学」昭和40年5月号）と題する拙稿を御参照いただければ幸である。今結論のみを記せば、それは、長者訓的な型を踏襲しながら比較的教訓を生のまま提出し、それを豊かな形象性の中で生かそうとする志向に欠けるものであった（注23）。と同時に、当時の経済状況や町人の現実生活を素材としながらも、教訓によって収束しよ

うとする志向が強いためにやや具象的な現実描写が不十分となり、随想的な作品構成を基調とするものが多かったようである。いわばそれは、寛永期の「長者教」以来の長者訓の伝統をストレートに受け継ぐ「大福新長者教」（副題）という色彩の濃い作品であったと見ることができるのである。

ここに、西鶴の安易さを見、手軽に作品をまとめようとした故にそれが未成熟に終わっていることを難ずることも自由である。が、貞享三年後半期の状況をすでに知り、「永代蔵」の版元が「椀久一世」を貞享二年二月、「五人女」を同三年二月に刊した森田庄太郎であることを考えれば、西鶴が、貞享四年の新版用の草稿を求め書肆の要請に応えて、やや手軽な思いつきを生かして身近な経済生活に関する話題をとりあげたことに、いささかの不思議もない。そして、そのような状況にあればこそ西鶴は、「長者教」の趣向を借りて新時代を反映すれば足りる一見書きやすい「新長者教」の執筆にとりかかり、やや安易な構想によってではあっても、新しい作品世界を作ろうと意図したのであろう。いわば、貞享三年後半期、多面的に模索をつづける西鶴が、「新長者教」を書こうというやや手軽な意図を持ったことから、それ以前の日本文学史に類例のない西鶴の町人物の世界が始まるのである。

しかし、その初稿は、そのまま刊行されず、一たん留保されることになる。その理由は推測する以外にないが、暉峻康隆氏が「『日本永代蔵』の成立をめぐる」（文学・昭和37年11月号）で初稿が原稿のままで回覧された可能性を予測しておられるように、それを讀んだ西鶴周辺の文化人グループの反応や読者の代表としての役割を持つ出版書肆など

の助言が、大きな役割を果したのではないかと考えられる。というのは、町人出身の、あるいは町人である彼らにとって、日常的な体験領域にある教訓や事実のストレートな提示が、慰み草になりうるはずもないからである。彼らにとっては、すでに常識である教訓が面白く書かれていなければ満足できないし、自らの体験・見聞が西鶴の文章によって面白くとらえかえされていなければ、それに興味をひかれることはありえないからである。

が、これは、貞享三年後半期の西鶴をめぐる周囲の状況を、余りに重く見すぎた憶測の感もあるかもしれない。初稿発表の留保の理由は、西鶴が自ら初稿の未熟さを反省した結果による、という風に、西鶴の主体性を重んじて考えるべきかもしれない。しかし、いづれにしても、西鶴が巻一―四を新たに書き下ろした（前出拙稿「西鶴小説における成稿過程の一面」参照）時、それらの読者グループの要求に十分応えうるものとして、慰み草でありつつ読者を動かすいわば文学として、それが書かれていることは確かである。が、それがどんな位相を示しているかは、貞享三年の西鶴をあつかう本稿では、もはや触れる必要のないことである。

貞享三年に執筆されていると考えられる作品の最後にとりあげる翌年四月刊の「武道伝来記」は、三年十一月刊の「二十不孝」につづき、又しても岡田三郎右衛門が版元となって刊行されたものである。従って、これは、一応「二十不孝」執筆後にとりかかった作品と考えてよいであろうから、貞享三年末を中心とした時期に書かれた作品ということになる。



「武道伝来記」が敵討ちをとりあげた作品三十二章よりなることは周知の通りであり、それを書くきっかけとなったのが、「男色大鑑」前半四巻の主流を占める武家の衆道をめぐる話を書いたことにあることも、従来云われる通りであろう。そして、野間光辰氏が云われる、「西鶴は日本の読書人口の主要部分を構成する武家階級を目当てに、特に販売ルートの関係から日本最大の武家都市である江戸の読者を目当てに、『男色大鑑』に引続いて武家物の作をあらわした」（「西鶴と西鶴以後」・岩波講座日本文学史第十巻）と云う推定も、貞享三年後半期の西鶴の状況を知る我々には、すぐれて説得力を持つ仮説であることは確かであろう。

しかし、いわゆる武家物を西鶴が書く理由として、貞享三年当時果して浮世草子をどの程度読んでいたか解らぬ武家読者の登場まで考えなくとも、この時点の西鶴には、その理由が十分考えられるのではなからうか。が、もちろん私は、それを従来云われているように、「諸国はなし」その他にある武家説話や「男色大鑑」前半をすでに書いたことに帰しようとするのではない。それが契機の一面をなしていることを否定するつもりはないが、西鶴が正面から武家社会をとりあげる理由は、もっと別の面から考えてよいのではなからうか。

貞享三年の西鶴が、風俗や人の心への強烈な関心を示しつつ、その認識を拡大しようとしていることは、前述のごとくである。そして、そのような西鶴の模索が、町人の世界ばかりではなく、支配者である武家の世界にまで拡大して行くであろうことは、当然予想出来ることである。というのは、元商人である西鶴にとって、武家の世界、又そこに生きる人間の行為や心情や風俗は、その興味を十二分に惹きつけるに足るもの

だからである。すなわち、当時の大阪町人が、消費者（武家）と生産者（農工）との間に介在し、流通過程を牛耳ることで利を得る商人として生きる以上、武家の意識やその生活、武家の中での話題に強い興味を示すのは当然だし、むしろ武家社会への認識の拡大は商人がその商機を得る上にも必要だったはずだからである。

事情は、町人読者の側でも同じである。武家の話に興味を示すのは、必ずしも武家であるとはかぎらない。かえって商人であるからこそ、より強く武家社会の話題に興味を示すということは、当時の商人の置かれていた立場を考えれば、十分に推定出来ることのはずである。とりわけ貞享三年期、西鶴の読者層が拡大し、専門の俳諧師グループや文化人グループ、あるいは芝居や遊里に関係する有閑読者層ばかりでなく、商売にも励む町人層までも西鶴小説を読むようになっていたとすれば、なおさらのことである。武家物が、町人読者に興味を持たれないはずのなことは、以上によって明らかであろう。

従って、明確に読者を意識する貞享三年後半期の西鶴が、風俗や人の心への認識を拡大して行く模索の中で、武家の世界をとり上げようとする時、それは、興味ある話題であると同時に、武家の意識や心情、その風俗を鋭くとらえ得るものである必要があったことは当然であろう。そして、「敵討ち」とは、まさに好適な素材であった。何故なら、それが非日常的な行為であるが故に、日常的な生活の中ではないかがいえない武家の心情や行動様式が、拡大した型で把握しやすい素材が「敵討ち」だからである。しかも西鶴はすでに、好色、男色、不孝等々、非日常的な世界を話題としつつ、日常性の中ではとらえきれぬ人の心の種々相をう

かび上らせるという方法には慣れ切っている。「武道伝来記」が、時に記録類にたよりすぎてやや低調な作品を含みつつも、又武家の行為や心情に対する町人的な偏見をまじえつつも（あるいはそれ故に）、武家社会の風俗や人の心を西鶴なりにとらえられている作品であることは明らかである。私は、従来伝わっているとは異なった所に西鶴の腕の見せ所を見、「武道伝来記」をとらえかえしてみなければならぬようである。

## 四

以上、私は、貞享三年に出刊、あるいは執筆されていると考えられる作品を主としてとりあげつつ、そこに見られるさまざまな問題に対する私見を述べて来た。それは、本稿の目ざす所が、貞享三年の西鶴の状況を不十分な資料（それも作品）から明らかにすることであつたため当然ではあるが、やや抽象的な論述に終始してしまつたようである。それ故本稿は、前記の諸作品を本格的に論じて行くための序の役割を果たすのみで、その具体的な解明をまづ始めて説得力を持てるか否かが認定される性格のものになつてしまつたようである。

が、貞享三年の西鶴を全体的に問題にしてみれば、この年が、西鶴の浮世草子作者として最も重要な時点、いわば転換と模索の時点であることを、改めて確認しえたように思う。そしてそれは、俗に云えば書きまくるといふ作家生活の中で行なわれているものであるが、その風姿は、いわゆる近代作家がその転換と模索に見せる苦渋を一切示さず、ま

さに大らかに行なわれているようであり、近代作家的な西鶴像の転換を要請しているが如くである。

又、その転換と模索は、やや抽象的な記述によつてではあるが、西鶴の風俗や人の心に対する認識拡大の欲求、いわばその基本的な認識の構造が一貫して存在している故に生まれていることも、不十分なりに明らかにしえたのではないかと思う。が、出発点を見究めても、そのゴールである作品が具象的に又ダイナミックに形象されて行く過程の追求は今後に残されたままである。しかし、西鶴の認識が具体的に動きつつある過程を明らかにするいわば方法への追求は、個々の作品論による以外はないし、あるいは、それをより肌目細かく行なうには、作品の評釈という型をとるより仕方がないかもしれない。いずれにしても、私に残された課題は少なくないようである。

(1972・12・30)

注1 野間光辰氏「近代艶隠者の考察」(『西鶴新攷』所載)

2 日本古典文学全集「仮名草子・浮世草子集」(小学館)の長谷川強氏の解説等。

3 天理図書館編『西鶴』が萬屋の相版元である本を初版と推定しているが、「二十不孝」で「萬屋」を「萬谷」と誤り、それ以外の作では「萬屋」となっていること、「一代女」の相版元として加わっていないこと、又、貞享三年後半期の作でも「二十不孝」と同時の「男色大鑑」の初版では相版元になっていないこと、等から見て、萬屋が江戸の売捌き元として相版元に加わるのは、「二十不孝」以後と考える方が妥当と思われる。

4 野間光辰氏「西鶴の転向―西鶴第五書簡をめぐって―」(文学・昭和41年1月号)

5 拙稿「『好色一代男』の時間意識」(近世文芸・十一号)

- 6 野田寿雄氏「西鶴」(三一書房刊)等。
- 7 詳細は、拙稿『好色一代女』論序説(『近世文学論集—小説と俳諧—』所載)を御参照いただきたい。
- 8 拙稿『日本永代蔵』初稿の成立時期(『文芸と批評・第一巻五号』)
- 9 拙稿『万の文反古』の二系列(『国文学研究二九集』)及び『万の文反古』における書簡体の意味(同上三九集)参照。
- 10 「嵯峨の隠家好色庵」(西鶴研究・第五集)
- 11 「西鶴入門」(解釈と鑑賞・昭和44年10月号)
- 12 助作者の問題をとり上げる以上、「一代男」以外は非西鶴作とする森銚三氏の見解を無視する訳にはいかないが、森氏の見解に問題提起の意味はあったとしても、現在森氏の提出された問題はすでに決着がついていると思われるので、ここではとりあげない。
- 13 この点に関し、もし板坂氏「西鶴文反古」団水擬作説の「資料」(『文学・昭和30年1月号』)の指摘する「色道大鼓」巻末の一文が団水の創作とすれば、すでに一つの有力な論証があることになるが、その文と類似の文を持つ「文反古」の作は卷三の一であり、後述のように私はそれを貞享三年後半期の作と考えるから、むしろその一文は西鶴が団水に書き与えた作、ないしは、同一出典によるものと考えべきだと思ふ。その点については注9の拙稿参照。
- 14 暉峻康隆氏「貞享三年好色本禁令説について」(『西鶴評論と研究・研究ノート』所載)
- 15 拙稿『好色一代男論』序説(「問題の設定」)(『近世文芸研究と評論』三三号)。
- 16 拙稿『諸艶大鑑』への一視点(『中央公論社より近刊の『西鶴論集』に掲載予定)。
- 17 ここで前半四巻後半四巻といういい方をしないのは、「男色大鑑」の成立に関し私は、後述のような憶測をしているからである。
- 18 昭和四十七年秋の日本近世文学会における口頭の研究発表による。
- 19 卷一の三、卷二の二、卷三の一、卷四の二、卷五の一。
- 20 卷一の二、卷二の四、卷三の一、卷四の一、卷五の一にそれを見ることが出来ると思ふ。
- 21 貞享四年五月刊の「西行撰集抄」が、西鶴の自画自筆の版下によるものであるとすれば、「懷硯」での伴山の登場に、「撰集抄」の説話構成の影響を見ることも出来るのではないかと考えるが、詳細は別稿を期したい。
- 22 やや長文にわたる書簡の引用が、一の一、一の四、一の五、二の一、四の二、六の二、八の三に見られるばかりでなく、書簡を作中でとり上げる例は頻出する。
- 23 具体的な様相については、日本古典文学全集『井原西鶴集(白)』所収の「永代蔵」の注釈で簡単にではあるが触れているので、御参照いただければ幸である。